

医薬分業めぐり議論過熱

薬機法改正控え、是非問われる

「メリット感じない」と指摘も

来年度の医薬品医療機器法の改正を控え、医薬分業をめぐる議論がヒートアップしている。本来は、薬局・薬剤師のあり方を制度面から見直しが必要か検討する目的なのだが、日本医師会の委員が執拗に医薬分業のメリットが感じられないと主張。患者代表の委員も同調し、議論の焦点が医薬分業の是非に移った。法改正を議論する厚生労働省の審議会でも、日本薬剤師会が現行の薬機法における薬局の役割を定義し直し、法律上明確にすることなどを提案したが、委員からは、「医薬分業のメリットが感じられていない」「医薬分業自体を見直す時期に来ている」「わざわざ法律に書き込まないといけないことか」など、現状の医薬分業や薬局に対して厳しい意見が相次いでおり、なかなか逆風は止まない情勢だ。

厚労省は、7月5日の厚生科学審議会部会で、薬機法改正に向けた薬局・薬剤師に関する検討事項として、薬剤師が患者の状況に応じて服薬状況を把握し、その結果をかかりつけ医と共有するなど薬剤師の専門性をより発揮できるような対人業務を強化する仕組みを提示。また、対人業務を充実させるため、業務実態を精査し、調剤機器やオンラインによる服薬指導の活用などによる効率化の重要性といった論点を示した。

ところが、患者代表の山口育子委員は「医薬分業率は上昇したが、そのメリットを感じられていないことが問題」と指摘した上で「薬局・薬剤師は危機感を持って変わっていくべき」と発言。日本医師会副会長の中川俊男委員も、院外処方調剤技

術料や患者負担が院内処方比べて高いことを問題視し、「医薬分業自体を見直す時期に来ている。院内処方に回帰する議論があってもいい」と指摘。「医薬分業のありがたみは感じていない。在庫管理を心配せずに自由に処方ができるくらい」とまで踏み込み、医薬分業の是非に議論を引っ張った。

しかし、日本薬剤師会の乾英夫委員は「その通りだと思っている」と認め、「国民、患者、地域住民のために役割を果たしているかということが突き付けられており、われわれも変わっていかねばならない」と話すなど、目立った反論はしなかった。

さらに、乾委員が日薬と日本保険薬局協会、日本チェーンドラッグストア協会の3団体による意見書を提示。薬局が全ての医薬品・衛生材料などを供給する機能を持つ施設であることや、地域で多職種連携を図るよう努める必要があることなどを法律上明確に定義するよう求めたが、複数の委員から、敢えて法律に明記する必要はないと反対意見が出た。医薬分業の是非が問われているところ、薬局に関する詳細な機能を法律に明記するよう意見書を出したものの、理解が得られなかった格好。医薬分業のメリットについても議論を押し戻せなかった。

その後、7月25日に開かれた部会では、積み残しの課題であった「地域で医薬品提供体制を確保するための薬局の体制整備」、「薬局の組織ガバナンスの確保」などについて議論。薬局の体制整備について、委員から、薬局の規模や備えている機能によって対応できる業務が異なるため、「薬

考えよう!

キャリアデザイン

就職先を決める前に

③

今回は「就職先へのこだわりの有無」についてです。私は日頃就職活動をする薬学生の相談にのっていますが、毎年のように「まずは病院に就職した方がいいのか？」と聞かれます。薬学生が自らそう考えているのではなく、指導教授や親や就職課などから「いったんは病院に就職して、その後ゆっくり考えればいいのか」と勧められているのではないかと想像しています。

確かに薬学部が4年制だった頃は実習期間が1～2週間と短く、「最初は病院に就職」とよく耳にしました。様々な疾患に悩む実際の患者を診て、医師の治療方針と薬の使い方を学びたいのが理由です。

現在の病院実習は約3カ月です。病棟活動も経験でき、カンファレンスにも参加します。毎日皆さんを指導して下さった方々は「最初は病院に就職すると臨床の勉強ができていいよ」と言っていましたか？それよりも「チーム医療で働くには深い知識だけでなくプロ意識が大事だよ」とか「医療人マインドを持って」とか、情熱やビジョンを持って働くことが大切と教えて下さったのではないかと思います。

取得を希望する薬学生が多い「が



キャリア・ポジション社長

西鶴 智香

ん専門薬剤師」ですが、「最初の数年は病院で勉強したい」程度の意識では取れません。専門や認定資格を取得している薬剤師は、規定の年限以上勤務し、多数の症例を経験したり、学会で発表したり、論文を書いたりした成果で認められたのです。

実は最近、ある学生さんが病院をひとつ受けたが不合格になり、落ち込んで「薬局に志望変更しようか」と言い始めました。自分が目指す病院薬剤師になりたいなら、こだわりを持ってとことん就職活動をして、受かるまでいくつも受けたらいいのです。

それでもどこの病院も採用してくれなかったら、それはひょっとしたら自分には向いていないか、もしくは何か足りないのでしょうか。その時は異業種で働きながら再度自分を見つめ直し、なおチャレンジしたければそこからまた挑めばいい。就職先にこだわりを持てるように、就活前に再度じっくり考えてみましょう。

局として備えるべき最低限必要な機能がどの程度なのか実態を把握すべき」「それぞれの薬局が有する機能や規模に応じて分類する方向での議論も必要」などの意見が出て、概ね前向きな議論が進んだ。

ただ、花井十伍委員（NPOネッ

トワーク医療と人権理事）は、「全ての薬局が医薬分業で最低限期待されるような仕事をしていないことが問題」と指摘。薬局の最低限の機能についてコンセンサスがないうとして、実態把握した上で機能分化の議論をすべきとの考えを示した。

やさしい臨床医学テキスト 第4版

【編集代表】星 恵子(聖マリアンナ医科大学客員教授)



“難しいことをやさしく解説”をコンセプトに、様々な疾患の「病気の成り立ち(概念)」から「患者の訴え(症状)」「病状・所見」「臨床監査」「治療」までの一貫した知識を、医療の第一線で活躍する医師を中心にわかりやすくまとめたテキスト。

★Point

患者に安全・適切な薬物療法を提供するために重要とされる「臨床推論」に必要な疾患の基礎知識が身につく

治療法の解説では「薬物療法」に加え、「食事療法」や「非薬物療法」などについても記載

各領域の主要な疾患に加え、実際の医療現場で大事な周辺疾患についても多数収録

詳細はコチラ



B5判 / 556頁 / 定価 4,600円 + 税

◆薬剤師、薬学生、MRなど疾患の基礎知識を身につけたい方におすすめの一冊です。◆薬学部・薬科大学で教科書として多数採用されています。

薬事日報社 書籍のご注文は、オンラインショップ (<http://yakuji-shop.jp/>) または、書籍注文FAX03-3866-8408まで。